



淡座

江戸にまなび、

音と言葉のあわいをえがく

淡座（あわいざ）は、現代音楽、クラシック音楽、日本の芸術文化を行き来し、文化の古今と東西をつなぐことを目的とした、クリエイショングループです。

私たちは、様々な日本の文化のなかでも、とりわけ、江戸文化から学ぼうとしています。江戸文化独自の発想のもと、「形のないもの、目に見えないもの」、つまり、言葉、文化、哲学、思想など、ひとの生活を豊かにするものを探り方を模索し、作品や演奏として発信しています。

バッハの場 第6回

2021年12月18日(土)

16:30開場 / 17:00開演

会場……安養院 瑠璃光堂 (東京都板橋区東新町2-30-23)
詳細は、淡座ウェブサイト、SNS等で更新してまいります。

入場料：各回 2,000円 (限定60席) ・ 配信チケット：各回 1,000円
メール：info@awaiza.com ・ お電話：080-4091-6491

◀ 次回のご予約はこちら



配信チケットのご購入はこちら
本日の演奏をアーカイブで
もう一度お楽しみ頂くこともできます



バッハの音楽は「場」になる。

「距離を取る」ことが求められる今こそ追求する独奏で「場」に触れ、疫病退散を祈念する連続演奏会。

あわいざ 淡座リサイタルシリーズ Vol.2

バッハの場 第5回
無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ・パルティータ全曲
無伴奏チェロ組曲全曲演奏会

淡座リサイタルシリーズ Vol.2
無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ・パルティータ全曲
無伴奏チェロ組曲全曲演奏会
バッハの場 第5回

日時 2021年11月20日(土)
16:30開場・17:00開演

会場 安養院 瑠璃光堂
三瀬俊吾 (ヴァイオリン)
竹本聖子 (チェロ)
桑原ゆう (作曲)

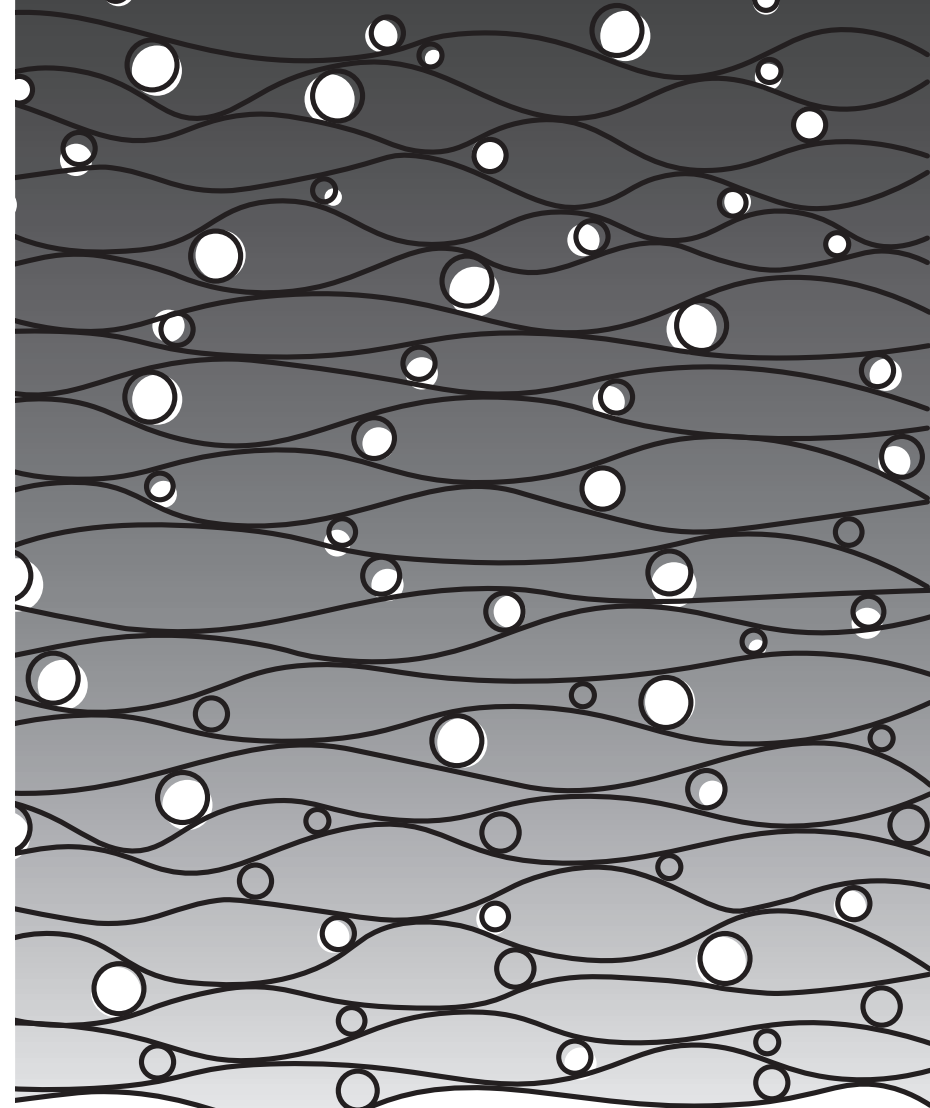
今回は、本條秀慈郎はお休みです
映像協力 / 株式会社たんどう
宣伝美術 / 桑原ゆう
主催 / 一般社団法人淡座
共催 / 安養院

場

12画 ジョウ(チャウ) ば・にわ

易は玉(日)を台(二)の上に置き、玉の光が下方に反射する形。易は霊の力を持つと考えられた玉によって、人の精気を盛んにし、豊かにする魂振りの儀式をいい、その儀式の行われるところを場という。また神を祭るところを場と

いった。
(白川静「常用字解」平凡社より)



感染症対策のひとつ「人と人との接触を最小限に留めること」を逆手に取り、独奏を追求するリサイタルシリーズ。

ひと月に1回ペースの全6回公演で、三瀬と竹本が、バッハの無伴奏全曲演奏に挑戦。桑原作品を組み合わせたプログラムで、ふたりの独奏を存分にご堪能いただきます。第6回は、ゲストとして、安養院にゆかりのあるフルート奏者、瀧本実里さんをお迎えします。

各回、アフターイベントで作品や演奏をさらに深掘りし、次の回につなげていきます。第3回以降、安養院内庭園舞台での演奏も検討しており、バッハの「場」を淡座ならではの視点で、多角的に追求する試みです。

● 曲目と解説

演奏する者も、聴く者をも試すかのような、バッハの無伴奏作品。この全曲演奏シリーズも、残すところあと二回。

今回のアフターイベントは、庭園舞台公演第二弾。長嶺ヤス子さんとのコラボレーションで、「バッハの庭」を体現すべく試みます。

J.S. バッハ／無伴奏チェロ組曲 第5番 ハ短調 BWV1011

1. プレリユード
2. アルマンド
3. クーラント
4. サラバンド
5. ガヴォット
6. ジーグ

第5番は「スコラダトゥーラ」と呼ばれる変則的な調弦法が用いられ、最高弦のA線を1全音下げ、G線として演奏する。作曲された当時、イタリアやその周辺地域において、スコラダトゥーラは決して特別ではなく、一般的な調弦法として扱われていた。現在では、通常の調弦法にて演奏されることも多いが、その場合、鳴らすことの出来ない和音もあるため、スコラダトゥーラで演奏することが望ましいように思う。譜面には、実際に鳴る音ではなく、押さえる指の位置が表記されている。

5番の組曲も、プレリユードとそれに続く5つの舞曲の計6曲から成る。「プレリユード」は、荘厳な付点リズムによる序奏部と、それに続くフーガという、対照的な2つの部分から成る。2拍子の「アルマンド」は、1拍目から引き伸ばされた16分音符と、跳ねる付点のリズムとが合わさっている。付点のリズムは、王様や神様の権威を表すリズムとされる。「クーラント」は、駆け抜けるようなイタリア風と違い、堂々とした面持ちのフランス風クーラント。3拍子と2拍子が交互に現れ、変化に富んでいる。ゆったりとした3拍子の「サラバンド」は、リズムはとても単純だが、深い嘆きのような音型が印象的。「ガヴォット」は今回が初登場。前半のガヴォット1は、和音が多く書かれているが、軽やかで楽しい雰囲気。続くガヴォット2は、ほとんどが3連符のリズムで、軽やかに奏される。最後を締めくくる「ジーグ」は「カナリー・ジーグ」とも呼ばれ、鋭さのある活発なリズムが特徴的。

この組曲は、BWV995の「リュート組曲」に編曲されており、こちらはバッハによる自筆譜も残っている。(リュート組曲の方が原曲という説もある。)こちらは大変素晴らしく、ぜひお聴き頂きたい。

(文／竹本 聖子)

J.S. バッハ／無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第3番
ハ長調 BWV1005

- 第1楽章 Adagio アダージオ 3/4 ハ長調
- 第2楽章 Fuga (Alla breve) フーガ (アッラ・ブレーヴェ) 2/2 ハ長調
- 第3楽章 Largo ラルゴ 4/4 ハ長調
- 第4楽章 Allegro assai アレグロ アッサイ 3/4 ハ長調

全6曲の曲集の5曲目にして、初めての長調の作品。1番2番のソナタと同様に、4つの楽章は緩―急―緩―急の順番で構成される。



第1楽章は付点の連続で、波が寄せては返すよう。半終止という不完全な終止形で、長大な第2楽章へのプロローグのようである。フーガのテーマはいろいろな声部で掛け合い、立体的に繰り広げられる。後半になるとテーマは逆の形になり、再び元に戻り冒頭を回顧するように幕を下ろす。第3楽章のラルゴは、イタリア語で「幅広くゆったりとした」を意味する。へ長調で穏やかな楽章。第4楽章は主に16分音符で構成され、冒頭のリズムがテーマになり、音程の跳躍が大きく華やかに転回していく。

(文／三瀬 俊吾)

桑原ゆう／無伴奏チェロのための ソナタ・ヴォカリーズ (2021)

「ソナタ」は時代により移ろってきた。いま「ソナタ」というと、古典派以降に主流となった独奏ソナタを想起することが多いが、もともとは「鳴り響く」という意味の sonare に由来する語で、単に「演奏されるもの」というくらいの意味であった。

本企画で、無伴奏チェロ、無伴奏ヴァイオリンのために「ソナタ」を書くことになり、西洋音楽の歴史の大筋をつくってきたともいえる「ソナタ」にどう向き合うか、自分の立ち位置を確認する必要がある。今回の《ソナタ・ヴォカリーズ》は、「楽器を鳴らす」ことに立ち返った作品とした。このところ、作曲することにだいぶ疲弊しているため、緊張のレベルを微細にコントロールする普段の作風から少しはなれ、息抜きの作品を書くことが必要だった。

(文／桑原 ゆう)

補記：「バッハの場」第5回アフターイベント 庭園舞台踏公演
演奏構成 (舞踏／長嶺 ヤス子・演奏曲構成／桑原 ゆう)

1. プレリユード (無伴奏チェロ組曲第2番より)
2. アルマンド (無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番より)
3. クーラント (無伴奏チェロ組曲第4番より)
4. サラバンド (無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番より)
5. プレー |・|| (無伴奏チェロ組曲第3番より)
6. メヌエット |・|| (無伴奏チェロ組曲第2番より)
7. ジーグ (無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番より)